

私が見た戦争と学童疎開の体験

安部 房子

上高田二丁目

昭和十六年に戦争が始まり、昭和十九年私は十一歳の小学六年生で、上高田小学校より空襲をのがれて学童疎開に参加しました。七月にクラスごとに校舎を背に校庭で最後かもしれない記念写真を撮り、それが本当にクラス全体の最後の写真になりました。

話は別になりますが、私の子供のころの記憶にある日本の兵隊さん達の、やさしい人間らしい笑顔について書いておきたいです。

私は小学二年生ごろから、代々木の練兵場（友達同士そう言うっていたのです）へ、葉の付いた曲がった人参や、大根葉等を持って、そこにいた黒、白、茶等の馬達にやることを楽しみにして行きました。兵隊さん達は、ふるさとの自分の子供の話や馬の話、馬のクセ等を話し、時々はキャラメル等をくれました。また、家族の写真を見せてくれた時はうれしそうでした。じきに戦争がきびしくなり、馬や休息する兵隊さんもいなくなりました。そして、戦争で亡くなった兵隊さんのお骨の出迎えに、

日の丸の旗を持って時々駅まで行ったこともありましたが、子どもも気持ち沈む時でした。

その後、昭和十九年七月、福島県浪江町の百足旅館に学童疎開として大変お世話になり、地元の小学校へ行きました。東京からハーモニカ楽団が七、八人ほどで慰問に来てくれたことは、楽しい思い出でした。疎開中は三度ともお米の食事が食べられました。また、おやつにカボチャやとうもろこし、スイカ、ナシ等も食べることも出来たのです。地元の農家や農業学校からの特別な物でした。農家の人手不足や食糧増産等、稲刈りや芋堀り、いなご採りに参加することもありました。旅館のじいちゃんや、いなごをつくだ煮にして私達も食べ、東京にも送り、また冬の寒い時期には落穂拾いをしてその米を東京に送りました。東京からはバター等が学童用として届きました。それを朝食の時、熱いどんぶりご飯にのせて食べました。後からの話では、その時私達は恵まれた環境にあったことを知りました。正月に農家からのおもちとおよばれがあり、ギンナンや栗を焼い

て食べました。でも寒い雪の時でも暖房は火鉢だけで、靴下も手袋もない子供が多く、霜焼けの出来ない子供はいませんでした。霜焼けがくずれて包帯が靴下のように巻かれました。歩く時は足をひきずっていました。また、風邪をひく子供が多く、先生と保母さんは大変でした。昭和二〇年三月、私は六年生卒業と女学校（現在の中学校）入学のため東京へ帰ることになり、農家の方達から大豆やおもち、米までいただいて列車で東京へ向かいました。東京が近くなって、夜なのに空が明るく、赤く夕焼けのように見えました。空襲による火災も大雪が降って下火になり、新宿を過ぎた所より中野駅あたりは六〇センチ以上も雪が積もって、上高田の家まで二時間近くかかり、雪にまみれ、ころびながら着きました。家族はびっくりしました。雪の中を汗だくで持って帰ったおもちや大豆は、食事抜きが多かった家族が食べたので、じきになくなり、初めて東京の食糧事情を知りました。また、東北に行けば食糧があることを知ったおばあちゃんとおばさん達は、すぐに秋田のふるさとへ行く決心をして行きました。その後すぐ、上高田小学校も空襲で焼け落ち、石の門とプールが残り、給食もなくなり、おばさんも栄養不足と働き過ぎで結核になり、死にそうにもなりました。毎日のように空襲がつづいて、夜も安心して寝ることは出来ません。お寺の大きな防空壕に入ったお年寄り多数が、爆弾が落ちて亡くなったことを知らされ、私は防空壕に入ることをやめて、し

っかり空襲を見ることにしました。アメリカのB29の飛行機に日本の高射砲が命中し、夜空で火だるまになり、赤い太陽のようにも見えて落ち、ものすごい音がしました。落ちた所の家はなくなったのかと思いました。幸いに私の家のまわりは麦畑と野原で商店がなく、一発の爆弾も落ちませんでした。近くのバケ野原には避難の人達で一杯でした。朝にはもう一人もいませんでした。家の前の歩道は食糧生産のため、芋や豆が植えられて畑になり、また、雑草類、あかぎ、たんぽぽ、のびる、つくし、はこべ等も工夫して食べました。配給のamiノ酸醬油を使い、フスマや大豆カス等も食べ、私はきらいな食べ物がなくなりました。

入学した目白学園は家から一番近く、森に囲まれて丘の上にあります。大きな横穴の防空壕もあり、焼かれずに残りました。しかし、B29爆撃機の翼の破片や残骸が校庭に落ちていました。教室のガラス窓は割れていました。昭和二〇年四月の入学の時にいた一七〇名以上の入学者は、二六年卒業の時四〇名ほどになり、栄養不良や病気等で親を失う人が多く、自分で働いて一家を養う人もいました。学校に行けることがいかに幸せなことかと思いました。焼けて校舎のない学校に入学した人達も多かったと思います。

教科書は新聞紙のように印刷されているものを自分で切って、綴じて作りました。エンピツやノート等は配給でした。私は母

の女学校時代の教科書で歴史や国語を勉強し、また、地下に図書室がある学校（現在の国学院大学）を利用していただきました。

今年六〇歳になった私は、今戦争に参加しなければ生きて行けない人や、それを防ぐために戦わなければならない人達がいることを考える時、一部の人達への経済のひずみや片寄り、おもしろくない政治、助け合えない話し合いや人間関係、また、人の命を大切に考える人間としての教育を受けられない子供が世界中にいることを、新聞やテレビの情報あるいは海外旅行等で知り、今、自分に出来ることはないのは残念に思います。私は大人になっても戦争が出来ない子供の気持ちでいたい。

先日、福島県矢吹町の特別養護老人ホームの寿光園にボランティア研修旅行に行き、ホームの方達につたない「江戸芸かっぽれ」踊りを十八名で踊り、ホームの皆様によるこんでいただき大変幸せに思いました。その上名物のお菓子をおみやげにいただき、私は昔にもどった気持ちになりました。

